

## 吉江孤雁と島崎藤村

### －島崎藤村『東方の門』構想を巡って－

【日時・場所】平成21年12月5日（土）13：30～ 松本大学 126講義室

【講師】長野県短期大学学長 上條宏之

#### はじめに

私は、長野県国語国文学会では中信支部の会で1994年度（平成6）に一度、窪田空穂について話をさせていただいたことがあります。今回は、腰原会長さん自らわざわざ長野市の私の勤め先まで来て、「何か講演を」と依頼下さったので、表題について日頃考えていることをお話しさせていただくことにしました。

松本大学の立地する新村にとって、松本市合併前には隣村であった和田に、私の自宅があります。また、歌人で古典研究の業績が多く小説・随筆も残している窪田空穂の生家、記念館があります。この記念館運営委員会の委員長を現在私が務めており、毎年度2月上旬ころから同館が行っている講座「冬ひざし」の最初に、私が「空穂の自伝を読む」と言うテーマで、連続して空穂を巡る話題を提供しています。その空穂が、「魂あえる友」と表現した人に吉江孤雁（喬松、明治13年9月5日生まれ、成長の地は東筑摩郡塩尻村＜現塩尻市＞長畝、昭和15年3月26日長逝）がいました。私が、この吉江孤雁に関心を待ったのは、つぎの3点からです。

まず、①空穂の早稲田大学の学生時代からの親友で、教授としても相互交流があって両者の業績にはそれが深く関わっているばかりでなく、孤雁の父久一郎（号は楓堂）が木下尚江・中村太八郎らが我が国で先駆的に開始した松本平普通選挙運動に関わっていたこと、②もう一つは、島崎藤村の『夜明け前』に歴史学者としての関心があり（私は平田国学研究などをしてきておりますが）さらに藤村最後の長編小説で藤村の逝去で未完となった『東方の門』の構想のなかに、吉江孤雁が重要な位置を占めていること、③さらには、孤雁に自然に関わる多数の著作があり、彼の自然観が現在の地球規模における自然破壊を食い止めることに資する内容を持っていること、これらが私が孤雁に関心を持っている理由です。

#### 1 島崎藤村『東方の門』の成立と文学的評価

本日の講演のテーマに入りますが、藤村は1936年（昭和11）1月、63歳のとき、『夜明け前』によって朝日文化賞を受賞しました。これは、ちょうど私が生まれた年であり月です。藤村はこの年の6月、第六感想集『桃の雫』を岩波書店から刊行、7月には第14回国際ペンクラブ大会に出席のため、妻静子、有島生馬とアルゼンチンへ行きますが、その帰途、アメリカからフランスに回ります。そして、マルセイユのロンシャン美術館で、シャパンヌ作の壁画「東方の門」を見ます。小説『東方の門』の題名の由来に関わる経験でした。

超えて1942年（昭和17）、70歳の藤村は、アジア・太平洋戦争下の6月、日本文学報国会名誉会員となります。私生活では、8月に大磯の土地家屋を購入しており、秋には上京して「東方の門」序の章を執筆、11月第1回大東亜文学者大会に出席。翌43年1月に『東方の門』を『中央公論』に連載、これは10月まで載ります。しかし、藤村は8月22日大磯の自宅で脳溢血のため永眠。大磯の地福寺に埋葬され、遺髪と遺爪を馬籠の永昌寺に分葬されました。戒名は「文樹院静屋藤村居士」。

この最初の部分だけで終わった『東方の門』の文学的評価については、例えば、法政大学教授であった小原元は、「藤村の思想的見地」が「＜大東亜共栄圏＞的発想にちかいものをより多くもっ

ていたのではなかったか。」と言い、「<生の肯定>のための幾山河をへて『夜明け前』に到達・完成された世界」、「安定・調和をうちやぶる思想のダイナミズム」は、『東方の門』では失われていた、と低い評価しかしていません（『藤村全集 第十四巻』筑摩書房、付録「月報」所載・小原元「『東方の門』の藤村」）。

しかし小原元は、「『東方の門』は、日本固有の伝統たる<腰骨の強さ>を軸として日本近代史の世界史にかかわる<運命>をあきらかにしようとする構想が作者の念頭にあったとかがえられるだろう。」と言い、構想の大きさは認めています。

## 2 『東方の門』のモチーフ

藤村の構想は、「『東方の門』ノート」（『藤村全集』第十四巻、筑摩書房）の『雑記帳（ろ）』に、つぎのように記されています。

### ○明治20年代

- 明治維新の一大変革に際し生死に直面したる一禅僧—激しき時代の動揺の名もなき一僧侶に与へたる感動 69歳にして身を起し漂泊の旅に

### ○明治30年代—40年代

#### △交通関係の変革

- 日露戦争をめぐりて

天心、吉江、和助等の生涯（独歩、花袋等） 臨川の死

### ○大正時代

- 第一次世界戦争をめぐりて、思想の波動、

△吉江、和助

### ○国際連盟の成立

満州問題と連盟の脱退

日支事変—吉江の病死—和助の旅—大患—大東亜戦に至る

### ○昭和時代

（空白）

このなかに、『夜明け前』とのストーリーの上での連続性を示す禅僧（松雲＝桃林和尚）が最初に挙げられています。藤村にとって、『東方の門』における禅僧は、「恵那山麓に於ける旧時代の『最後のもの』」<『雑記帳（ろ）』の記載>と言う位置づけでした。この和尚に次いで、岡倉天心が挙げられ、天心と並べて登場させているのが「吉江」で、孤雁のことです。「明治維新の一大変革」を経て、日清戦後からの「交通関係の変革」が日本近代化のメルクマールとして重視され、「日露戦争」、「第一次世界大戦」と「国際連盟の成立」、それが一転して「日支事変」（日中戦争）以降「大東亜戦に至る」日本近代史の画期が記述されています。それを、「天心」、「吉江」、「和助」（藤村自身）、「臨川」（吉江の親友中澤臨川）といった人物を通して、文学的世界に構築しようとした藤村の文学的モチーフが、この記述にうかがえます。それは、さらにつぎのように具体化されています。

- 東方の門

中世の門を開くことなしには古代の門に達し難し。

随つてまた近代の意味を知る能はず。

○

- 訪問者

芳崖の荒物店、フェノロサ、天心の来訪

一 人物

福沢諭吉 桃林和尚 伊藤俊介 長瀬富郎 荻野さん 青山和助  
 故青山半蔵 岡倉天心 フェノロサ 吉江喬松 田山花袋 中澤臨川  
 國木田独歩

○

斎藤緑雨 故北村門太郎 蒲原有明 巖本善次 戸川秋骨 植村正久  
 馬場孤蝶 押川方義

○

大正年度

大帝 臼田禅僧

(行衛 不明の人)

ブランドの如き人物を思はせる性格の持ち主

近代日本画の父と言われる狩野芳崖（1828—88）、アメリカ合衆国から明治11年（1878）に来日した東洋美術史家・哲学者のアーネスト・フランシスコ・フェノロサ（1853—1908）、美術家であり美術史・美術評論・美術教育で活躍した岡倉天心（1863—1913）の3人をまず登場させているのは、『東方の門』のモチーフが、「天心を中心とし、東西の交渉と、世界史につながる東洋、とくに日本の運命を見さだめようとしたらしい」（吉田精一）という捉え方が間違いないことをしめしています（前掲小原稿より再引用）。福沢諭吉から始まる人物群では、文学者が多くみられます。別のメモ「肯定と否定」で「國木田、田山、中澤、吉江諸君。斎藤、蒲原君等の否定。傍観者戸川君、その晩年。酒客、馬場君の一面、歌人、懷擬家。」とあり、東西の交渉を肯定した人（國木田独歩—吉江）と否定した人（斎藤・蒲原）、懷擬的であった人（馬場孤蝶）に分けていますが、共通点として「皆明治時代の青春期を過去に持つ人々。年をとってそれぞれの道を歩み、それぞれの運命を辿り、それぞれの性格をあらはし…それぞれの出発とその到達点」があるとし、それに「A君（「故北村門太郎＝透谷」のこと。引用者注）の死出の旅のごとき。」が対置されています。実業家である花王石鹼の創業者長瀬富郎の名があるのは、藤村の生地に近い「美濃の人」であるとともに、歴史学者服部之総が1936年に花王石鹼の委嘱を受けて社史の編纂にかかり、1940年に花王石鹼50年史編纂委員会編『初代長瀬富郎伝』が出版されたことと関わりがあった、と私は見えています（藤村の蔵書の中にこの書物がある）。また、政治家伊藤俊介（伊藤俊輔＝伊藤博文）と大正年代に「大帝」とあるのは他の在野の人物群とは異質で、時代をリードした人としての位置づけで登場させようとしたのであろうと考えられます。なお、「荻野さん」は藤村のメモの他の個所で、「靴屋、和助のあみ上げの靴づくりし人、妻君コック」と注記しており、履き物の近代化に携わった庶民の一人でした。

こうしたモチーフは、藤村による『年譜 諸家のものと共に 静乃草屋』に、「明治元年」から「昭和18年」までの年次ごとに、上段「Y君」、中段「天心」、下段「和助」（藤村自身）を表示し、詳細な3人に関連する事項が記述されています。例示すると、中段の「天心」のみが「明治元年」から登場しており、「文久2年12月6日、天心横浜本丁通1丁目貿易商石川屋勘右エ門の二男として生る、少年時代の名は角蔵、この年7歳、兄は2つ上の港一郎、万延元年父41歳の時の子」とあります。一方、下段の和助（藤村）は「明治五年」に「2月17日生」とのみあり、上段の「Y君」（註＝吉江喬松のこと）の欄には、「明治13年」に「この年9月5日、松本市伊勢町なる母の生家にて長男として生る、成長の地は東筑摩郡塩尻村長畝、いく本の榎の巨木に覆はれた森の洪大な屋敷は屋号を酒屋と称し、殉情謹厚な少年にとって幽寂孤独の限りの環境であつた」とあるのが最初です。「Y君」の欄は、「明治19年」のY君7歳の欄あたりから詳しく、後に見る孤雁による自筆の略

歴を参考にしたと思われますが、それにはない記述もあって、孤雁研究の参考になります。

この藤村によって作成された年譜には、「東京麹町番町及び大磯東小磯にありて、この年譜は今年71歳に入りて長編に著手せしため昨年より制作のためにと用意せしもの。Y君その他のことも併記す。静乃草屋にて。昭和17年」と、藤村自身による最初の叙述があります。

こうしたデータによって明らかになる『東方の門』のモチーフに着目した藤一也『『東方の門』未完の構想』（『島崎藤村「東方の門」』沖積社、1999年、所収）は、藤原の覚書（「東方の門」ノート）に、つぎのようにある点にさらに着目しています。

#### 一 本質へ

明治初年より大正、昭和に至る一浅きより深まりゆくもの宗教と政治—美術—文芸—科学と歴史—何度も何度も生命の源に帰り行かうとするもの—あるひは古典へ—あるひは古代への出発点へ—あるひは個人としての眼ざめの時へ…。これを促すものの一つに交通の急激なる変革、歴史と人類の運命。

また、先に触れた人物群などを含めた部分についての藤一也のコメントは、つぎのように記述されています。

藤村がこれから書こうとする『東方の門』は、『夜明け前』がそうであったように、も一つの父青山半蔵への鎮魂歌であった。それは同時に、父の「第二の春」への回生の願いであった。中世の問題であった。『東方の門』の中心をなす主題（テーマ）は、巡礼であり、回国の旅であり、その旅は中国・インド・フランス・アルゼンチン・ブラジル・アメリカの旅であった。かつての西行・芭蕉・雪舟—山口を拠点とした雪舟にも出羽・立石寺、奥羽への旅があった—から、雪舟・天心の中国、天心インド、栗本鋤雲、藤村（和助）、吉江喬松のフランス、それに「こんな時代の空気の中へ基督教も入って来た」のプロテスタント・アメリカであったし、藤村は明治学院キリスト教の中で、多くの師友に囲まれて生活した。アメリカとの関わりは、前記ノート「人物群像」福沢諭吉、馬場辰猪（孤蝶の兄）、岡倉天心など、それにプロテスタント関係者の、多くがかかわる。『東方の門』の旅、それは<東と西>の東西文化の、交流史であり、交通史である。

この中で、馬場孤蝶でなく、孤蝶の兄で自由民権家であった馬場辰猪（1850—88）を取り出しているのは、藤村が平田国学の立場から父島崎正樹が抱いていた自由民権運動への否定的見解を引き継いでいたと考えられることから、筆のすべりでは片付かない評価の誤りを含んでいるように、私には思われます。しかし、つぎの指摘は私にとって肯定できるものです。

藤村の目は<東と西>の文化の<生命の源>に、そして<歴史と人類の運命>に注がれていた。その同じことは「宗教と芸術と文化と学問との人々の立場より／東西の交流／大陸との交渉／交通の歴史より」にも見える。藤村が大東亜戦争の中で思い描いたのは、日本の中国への勝利、インドへの勝利、ましてアメリカへの勝利という、戦争の論理、政治の現実ではなかった。『巡礼』の旅の中で、如実に経験したヨーロッパ中心主義、アジア蔑視の差別思想であった。その中で藤村は岡倉天心の「アジアは一つ」を聞いたのである。

それは、一つのヴジョンであった。そしてそれは同時に藤村のロマンティズム、理想主義、そしてユートピア願望であった。大東亜戦争で、藤村が現実面に汲み取ったものは、それまでの世界—東西—文明史になかった<東亜の理想>であった。

### 3 吉江孤雁の生涯と藤村との交流

見てきた『東方の門』のモチーフで、藤村が作成した吉江孤雁の略年譜のデータとなったものについては、『現代日本文学全集 第二十八巻』（改造社、1930年）の、いわば藤村が刊行物として参照できた孤雁自ら書いたものがあります。藤村の年譜の記述と類似したところがあることから、藤村はこれを少なくとも参照したこと間違いないと思われます。

吉江略年譜のうち、①1880年（明治13）から1892年（明治25）の部分および②1893年（明治26）から1897年（明治30）の部分为例示すれば、つぎのとおりです。

- ① 9月5日、松本市、母の生家で生る。成長したるは長野県東筑摩郡塩尻町。父は久一郎、母は松枝、旧に槻の巨木の立ちかくしてゐる旧い森の家は、少年時を送るに物寂しいものであった。父は槻堂と号し、漢詩人である。母は故あって大方生家へ帰ってゐた。父は最初は財産の整理、後は政治問題で大方家にはゐらず、父母と一年を通じて暮らしたことは全くなし。祖母と伯母とに大体育てらる。少し遅れて村の小学校へ行く。当初は高等小学で英語を教へてゐた。家では神経質の伯母が『近古史談』、『日本外史』などの索読を教へてくれた。この間憲法発布にて、戸々国旗をかかげて祝ひたる記憶あり。
- ② 松本中学校へ入学、この五年間は呑気で愉快的な生活であった。直ぐ上級に、塩澤重雄（中澤臨川）がゐて、「文学界」だの「国民之友」だの、創刊したばかりの「文芸倶楽部」だの、「新小説」だの、当時の文芸熱が山間の中学生までも動かさずにはゐなかつた時代で、彼に鼓吹せられて、夢中になって耽読した。好きな文章を抜粋して、2冊も3冊も抜粋帖を作つたものである。この間に日清戦争がやはり少年の情熱を掻き立てたものであった。

①の部分については、すでに紹介した藤村年譜「Y君」の「明治13年」の記述に重なる表現が見えます。②の部分は、「Y君」の松本中学時代の記述、例えば「明治28年」の「Y君16歳 中学五ヶ年間は比較的平穩無事暢然たる時代であった」や「明治29年」の「Y君17歳 直ぐ上級に塩澤重雄（註＝中澤臨川の本名）がゐてさかんに文学熱を鼓吹した、『国民之友』や、創刊後日なほ浅かつた『文芸倶楽部』、『新小説』等の文芸雑誌を耽読、これ臨川の影響による、当時愛誦した文章を集めて幾冊かの抜粋帖をつくつてゐた」も、明らかに吉江略年譜に依つたことを示しています。

言うまでもなく、フランス文学者であった吉江孤雁に藤村が着目したのは、孤雁がフランスに留学し、早稲田大学にフランス文学科を創設した人だからです。この藤村と孤雁は何時知り合つたのでしょうか。藤村は、1913年（大正3）にフランスへの旅にのぼり、3年間のパリ滞在から帰国したのは16年（大正5）7月4日でした。一方、吉江が渡仏したのは1916年（大正5）ですが藤村帰国後の9月で、藤村年譜の「Y君」欄には、「折しも世界大戦愈々急を告げ（中略）年来の希望なりし渡仏もなかなか学校当局に容れられなかつた、再三交渉の末、終に許可が出て九月出発」とあり、1920年（大正9）の「Y君」欄には、「9月帰朝、途次船中にて中澤臨川の死（8月10日）を新聞紙上に知り悲嘆やる方なし」とあります。孤雁と藤村とに、フランスでの交流はなかつたのです。

藤村年譜「和助」欄には、1909年（明治42）に「中澤君等を知る、龍土会」とあるほか、「和助」欄にしばしば「中澤君」の記載が見えるので、藤村が孤雁を知つたのは臨川を通じてではないかと推測されます。もっとも、藤村と田山花袋とは交流があり、吉江と一緒に仕事をしたことのある花袋を通して藤村の動きを承知していたことは、1934年（昭和9）8月に、雑誌『新潮』で「國木田独歩研究 作家研究座談会（一）」をおこなつた際に、藤村と孤雁が同席して語り合つたなかでわかりますが、藤村と孤雁の積極的な出会いと交流が何時から始まつたのかを、私は現在把握しきれず、今後の解明課題です。

ところで、孤雁がフランスに関心を持った経緯について探してみると、孤雁の著書『文芸隨筆

朱線』(1937年)所収の『ヴォルテールと日本』(1933年<昭和8>年1月)、松本中学生のときでした。つぎのように記述されています。

ヴォルテールがその「路易十四世」の歴史を書き上げたのは、プロシア王フリドリヒの宮廷に於てであって、彼が其処へ招かれて行く前に、フリドリヒ王と屢々取りかはした手紙の英文訳せられたものが、我々の中学時代の上級の教科書に使用せられてゐた。明治30年31年頃の事で、当時の中学は今日のやうな当局の検定を受けた教科書でなければ使用出来ない規定はなかったものと思はれる。教師が自由の選択で好むものを採用したのであらうけれど、それにしてもヴォルテールの書簡集を採用して、中学生に読ませるといふのは、相当奇抜な先生であつたのであらうか。我々が教へて貰つた秋山先生といふ人は、当時も既に相当の老人で、蘭学なども最初は少し修め(下略)

孤雁の自筆略年譜には、1898年(明治31)から1900年(明治33)について、「この間は家居を余儀なくせられて、家産が年々傾き、債鬼が門前に迫り、執達吏の来襲度々あり、陰鬱な不健全な生活、だだ広い家は雨戸を開けぬ部屋も多く、山林の抜採、養蚕の手伝ひなぞに身を疲らす。パイロンの『チャイルド・ハラルド』、ゲーテの『ウェルテルの悲み』なぞ耽溺、家に伝はる漢詩書を乱読。」と家居の時代の苦しかった生活の回想があります。

次ぐ1901年から1904年には、早稲田大学に学ぶことができ、「専念勉強」できるようになったことが、「前年の歳末、母は長年の別居より復籍。この年1月、上京、4月早稲田大学高等予科第一期生として入学。当時は1週40時間近き授業で、夜7時8時に帰ること屢々あり。専念勉強。窪田空穂、水野葉舟等と同居、中澤臨川帝大工科在学中、屢々往来す。英文学科といへども半ば哲学科の科目多し。坪内先生は自宅にて屢々文学研究会を開かれ、啓発指導、手をとらんばかりに教へらる。学課以外には、ロシア文学を当時、一般と同じく愛好す。『ツルゲネフ短編集』翻訳出版。35年母死去、37年、日露戦争始まる。ラフカディオ・ヘルンの晩年の講義を聴く。」と生き生きと記述したなかでわかります。空穂も、孤雁と同居した時期に孤雁が「専念勉強」に勤しんでいたようすを書き残しています。

一方、この時期の藤村年譜「Y君」欄は、1904年(明治37)について、「Y君25歳、窪田、水野君等と共に牛込矢来町3番地に同居せしはこの頃か、中澤君帝大の工科」に在学交遊猶続き、臨川は国許から学費仕送りも絶えがちで究厄に悩まされ通したY君に厚き友情を示した、又坪内、波多野両氏に啓発指導せられるところも多かった『ツルゲネフ短編集』の翻訳上梓」とあり、吉江略年譜以外のデータを参照した様子が窺えます。

以下、吉江自筆略年譜で、その後の動きを年表風に追いますと、つぎのようになります。孤雁は病弱で体調の調整には悩みましたが、学問的にみれば「専念勉強」の成果が順調に表れており、農民文芸会による文化運動にも指導的役割を当初果たしています。

- 1905年(明治38) 早稲田大学英文科卒業。研究科生として「英文学に現はれたる自然美の研究」なる論題にて島村抱月の指導を受ける。
- 1906年(明治39) 早稲田中学校講師となる。
- 1907年(明治40) 渋谷貞子と結婚。
- 1908年(明治41) 早稲田大学高等予科講師となる。
- 1910年(明治43) 早稲田大学分科講師となる。
- 1915年(大正4) 早稲田大学教授に任ぜらる。
- 1916年(大正5) フランス文学研究のために渡仏。
- 1920年(大正9) 帰朝して、早稲田大学に仏蘭西文学科を創設する。
- 1922年(大正11) レジオン・ドヌール勲章を贈られる。
- 1924年(大正13) 早稲田大学文学部文学科主任に任ぜられる。農民文芸会を作って指導に当たる。
- 1930年(昭和5) 早稲田大学文学部長に任ぜられる。

- 1931年（昭和6） 『仏蘭西古典劇研究』を出版。これによって文学博士の学位を受ける。  
 1932年（昭和7） 比較文学研究会を創設。『モリエール全集』出版。  
 1935年（昭和10） 『世界文芸大辞典』を監修。  
 1938年（昭和13） 早稲田大学理事に任ぜらる。海洋文化協会の成立に尽力する。  
 1940年（昭和15） 3月26日中耳炎が悪化、切開手術を受けたが経過が悪く死去。世田谷の自宅で葬儀、同区の豪徳寺に葬られ、故郷にも分骨埋葬。（凌雲院帯星孤雁居士）  
 藤村が、この吉江孤雁を『東方の門』の主要登場人物に据えようとした交流の深さをしめす出来事を最後に紹介して、私の話を締めくくりたいと思います。

#### 4 吉江孤雁の島崎藤村評価と『東方の門』モチーフとの接点

1921年（大正10）11月22日夜6時から、東京朝日新聞社四層楼上の大広間で藤村の50歳の誕生を記念した講演会が開かれています。その講演講師の一人が吉江孤雁で、彼は「其の夜不幸愛するいと子を失はれたのにもかかわらず、島崎氏との交友のために、その誕辰を祝すべく僅かの時間を割かれて参られた」のでした。孤雁の講演は「詩人と社会生活」と題するもので、藤村の日本文学史上の位置について論じながら、いわば日本文学史とヨーロッパ文学史とを視野に入れており、藤村がやがて『東方の門』でモチーフにするテーマ、藤村の今日的文学的課題を論じたものであったとしても良いものでした。この講演会のようなは、総合雑誌『信州』（第3巻第12号、諏訪の同人社発行）に掲載されています。孤雁の講演の重要箇所を、やや長くなるが引用してみようと思います。

なお、孤雁は前年の9月フランスから帰国し、早稲田大学文学部仏蘭西文学科主任教授として、フランス文学史、フランス古典劇の講座を担当、同時に日暮里渡辺町に居をさだめており、1921年には9月、フランス滞在中に『東京朝日新聞』や『文章世界』などに通信によって掲載された文章を集め、『仏蘭西印象記』を上梓していました（藤村年譜「Y君」欄）。

文学は時代より進むか、時代と共に歩むか、時代より後れるかの3つの時代があります。維新最初の20年は準備時代で、島崎氏が率先した時代はロマンチズム（理想時代）でした。日露戦役前後10年は、現実の時代で、今日は正しく現実理想主義の時代です。昨今は之に移つる中間の時代です。之より先は今の、ロマンチズム、リアリズムの時代を経過し、今後こそ完成期の芸術に向かうのではあるまいか。最近でも詩歌の芽が吹き出し劇が動く傾向があります。単なる現実への反抗が一種の新しき第三時代の文学が始まらんとしてゐます。島崎氏の明治20年代のロマンチズムの熱情の流路は、当時の青年を覚ましました。後の現実時代には、氏は忍苦した。両者が時代に合して第三となる時、氏のものもそうなるのではなからうか。50年の生誕に一時期を画して、更に完成へ飛躍するのではあるまいか。

凡そ維新以来の傾向は、歐のあらゆる時代を縮図してをる物質政治経済に世界と呼吸する如く、芸術も世界的呼吸をし又こちらから起す時でもある。二千年ある一つの国あり、充分の文明ありて、世界の文化に何等の影響をあたへぬ事は不思議、ただ支那、朝鮮に日本の芸術は何を与へたか、軍事のみとはなさない。

日本芸術の世界を動かしたのは、浮世絵（徳川期）のみである。今後は真の日本的で（国民の伝統－現実的）同時に世界的（理想的）でなくてはならぬ。詩人と社会的な生活とは、要するにある時は預言者指導者、或時は代表者となる関係だ。

島崎氏はロマンチズム時代は、代表者であった。リアリズムの時代は忠実に忍苦修練された。これから2つをもってゆく時代である。2つの完成の時代である。島崎氏の芸術の一新時期の機運と、日本のあけぼのの機運と合致せんとする時代である。それは現実と理想の交響楽の時代である。

喜びと共に大きい望みを島崎氏に申しあげ、その気分を頷つために来ました。今日一寸さしつかへあり、要領のみ申しあげました。

この講演の前段で、孤雁はフランスなどヨーロッパの文学史を整理して述べています。ここで孤雁が藤村の今後の文学的課題として指摘したものは、すでに見えてきた『東方の門』のモチーフにせめされ、藤村自身が考えていた文学的課題と一致していると言つてよいのではないかと私には思われます。東西の交流を「現実」＝日本と「理想」＝欧州の交響楽として文学的営為と表現し、それを、藤村の歩んできたロマンチズム、リアリズム、その二つを完成する文学的営為と重ねて捉えた孤雁の整理は、藤村に説得力あるものに聞こえたのではなかったか。そうした文学的営為こそ島崎藤村の「芸術の一新時期の機運」にふさわしく、「大きい望み」をもって孤雁は藤村に期待しているとする講演の主旨は、藤村を鼓舞したのではなかったか。藤村自身のなかでは、20年間以上のさらなる検討が必要であり、『夜明け前』に次ぐ、1942年の『東方の門』構想にそれがようやく成熟して具体化されていったのではなかったか、と私には思えてなりません。

しかしこの藤村の課題・構想が、未完に残された『東方の門』の序章に、具体的に結実しているかどうかを評価するには、また別の検討が必要です。歴史学者の立場から、引き続き考えてみたいと思っています。